

令和3年度 一般社団法人 埼玉県校外教育協会委嘱

## 校外教育研究紀要

### 研究主題

「潤い自然園を軸とした体験活動の充実による、  
積極的に環境と関わり生き生きと学ぶ児童の育成」

さいたま市立大宮西小学校

〒331-0052

埼玉県さいたま市西区三橋 5-1359

TEL:048-624-0035

FAX:048-624-2316

## 1 はじめに

本校はさいたま市西区の渋滞外の中に位置しており、全校児童数が800名程の大規模校である。敷地内にある「潤い自然園」という約1600㎡の広さの自然広場を始めとして、自然の豊かさが特色の1つとなっている学校である。学校目標として「自他共愛」を掲げ、「自分のことを大切にし、他人（友達や周りの人たち）のことも同じように大切にす」という心を育む教育を目指している。

## 2 研究の概要

### (1) 研究テーマ及びテーマ選定理由

テーマ：潤い自然園を軸とした体験活動の充実による、積極的に環境と関わり生き生きと学ぶ児童の育成

選定理由：本校には「潤い自然園」という自然広場がある。近年整備を進め、ビオトープベースの工事が完了した。しかし、整備の都合上活用はできていない状況である。令和3年度以降の効果的な活用に向けて自然園の整備を進めるとともに、自然園内外での多様な体験活動の充実を推進することで、児童の豊かな心身を育み、環境に対する関心を高めたいと考えた。

### (2) 研究計画

#### ○研究のねらい

潤い自然園をはじめとした自然との関わりや体験的な活動を通して、児童が身の回りの環境に対する興味・関心をもてるようにする。また、環境に対する理解を深め、自然を大切にし、よりよい環境をつくっていかうとする実践的な態度や資質、能力を育成する。

#### ○研究スケジュール

- 4月 校内分掌担当者による計画の立案・職員への周知
- 4月 各種植物の植え付け
- 5月 潤い自然園 生態系調査等
- 6月 バケツ稲での栽培開始
- 9月 バケツ稲の収穫
- 12月 栽培体験キャンペーン
- 1月 花壇の整備
- 2月 潤い自然園プロジェクト 作業実施
- 3月 使用済みカイロ回収箱の設置

## 3 研究の実践

本研究では、理科や社会、総合的な学習の時間、特別活動など、様々な教科等のねらいを達成することを目指す中で、教育課程に位置付けて様々な体験的な取り組みを行った。高学年の取り組みを主とする中で、他の学年が関わる機会も作ることで、学校全体として研究を進めていった。

### (1) バケツ稲の栽培体験

第5学年の社会科では、日本の食糧生産について、稲作などの具体的な事例を通して調べることを取り扱う。その中で、食糧生産に関わる人々の工夫や努力を体験的に捉えることができるようになることを目的として、JAグループの事業（やってみよう！バケツ稲づくり）も活用しながらバケツ稲の栽培体験を年間を通して行った。土づくりや芽出し、植え付け、水の管理などから始まり、稲刈りや脱穀など稲作の1年間を追った児童は、体験的にその大変さや自然を相手にする価値を味わった。また、日々、米が食べられている背景には生産者の工夫や努力があることについて考えることができた。



土づくりの様子



育った稲



稲架の様子

## (2) 緑化推進に伴う体験活動の充実

児童が栽培体験を通して植物に興味・関心をもつことは、その共通性や多様性に着目する力を育成することにつながる。本校においても、栽培委員会の児童がその中心となり、校内の緑化を推進する体験活動を行った。1つ目がグリーンカーテンの設置である。グリーンカーテンは正門から昇降口へと続く場所に設置したことで、登下校時などにその成長を追うことができた。栽培しているのはキュウリとゴーヤ、ヘチマのウリ科の植物であり、理科の学習や家庭科の学習などに関連させながら教科横断的に体験活動を有効に生かすことができた。2つ目が栽培体験キャンペーンである。栽培委員会の児童から、「学校 みんなに植物のことを知ってほしい」という意見が出たことから児童が計画を立て、花の種まき（パンジー・ビオラ・スイートピー）や球根の植え付け（水仙・チューリップ）の体験を始めとして、除草や水やりなどの体験を行う取組を行った。全校児童の4分の1にあたる200名程の参加者が、「春が楽しみだね」「どんな花が咲くんだろうね」などと話しながら意欲的に体験活動に取り組んだ。



栽培体験キャンペーン



グリーンカーテン

## (3) 「潤い自然園プロジェクト」を通じた体験活動

本校では、今年度より、第6学年の総合的な学習の時間で、「潤い自然園プロジェクト」として、自然園の生態系を豊かにする学習活動を始めた。潤い自然園は、一步入ると校庭とは大きく異なる生態系が広がっている。また、2019年、本校の50周年記念として、ビオトープエリアの整備を開始した。コロナ禍の影響もあり、整備が未完となっている部分もあるものの、ビオトープには雨水が流れ込み、周辺ではカエル、トカゲ、ヤモリ、カナヘビといった生物や、バッタ、トンボなどといった昆虫の他、ツバメやハクセキレイなどの野鳥も観察できる。自然のよさや自然との関わり方を考えられる児童の育成を目的として、自然園の在り方を課題として、体験的な活動を入れながら探究活動に取り組んだ。

学習は、理科の学習で潤い自然園の生態系を調査することから始まった。児童は、自然園の地図を片手に、植物も含めた生物がどこにどの程度いるのかを調べた。今まで知らなかった生物の存在に気付けた一方で、園内の木が安全のため伐採されていることやビオトープの水質問題、活用の停滞など、



夢の自然園プラン



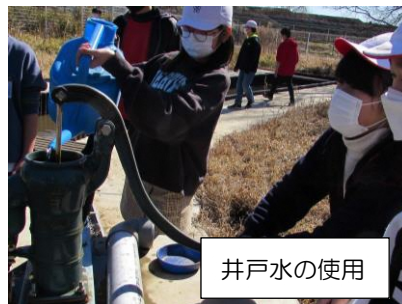
生き物を探す児童

様々な課題を知った。そこで、児童は、潤い自然をより自然豊かな場所にする

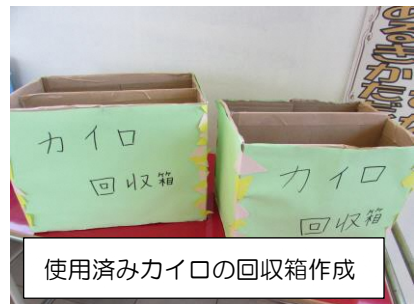
という目的のもとで、それぞれの「夢の潤い自然園プラン」を考える活動を行った。そして、そこで出たアイデアについて、様々な方法で調査や整理・分析を行い、児童が主体となって実践する内容や実施に伴って必要になる購入物などを決定した。2月に行った実践内容は様々で、ビオトープの水質改善を目指したグループは、ヘドロを除去し、使用済みカイロを再利用した水質浄化剤（GoGreenCube※参考 <https://go-green-group.com/>）をビオトープに投入した。また、自然園を通して、全校児童がより自然を身近に感じられるようになることをねらったグループは、畑や花壇の新設、木製遊具の作成、掲示板や地図作りといった活動に取り組んだ。また、自然園内で見られる生き物を増やすことを目的として、鳥の巣箱を作成したり、自然園を活用したネイチャーゲームを企画したりと、児童はこれまでもった考えをもとに、いきいきと体験活動に取り組むことができた。今後は、実践した内容を振り返り、他学年の児童や保護者、地域に対して実践の成果などを報告するためのまとめの活動を行っていく。



水路の整備



井戸水の使用



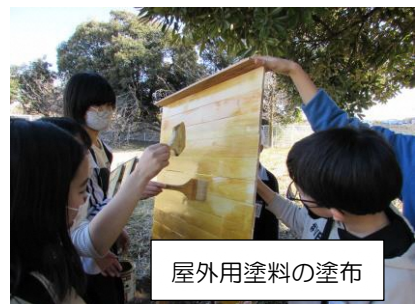
使用済みカイロの回収箱作成



用務員から木工を教わる



掲示板の作成



屋外用塗料の塗布



設計図をもとに巣箱作成



新設した花壇



畑の土壌改良

#### 4 成果○と課題△

- 自然を扱う体験活動を多く行う中で、自然のよさや、自然を大切にする行動についての思考を深めるような発言や記述が見られ、各教科等で身に付ける資質や能力の育成がより深まった。
- 体験活動を中心とした学習過程を実践する中で、児童同士が学習をより自分事と捉える姿や発言等が見られ、学習に対する意欲の高まりとともに、主体的・対話的に学習に取り組んでいた。
- △体験活動を設定する中で、各教科等の授業時数を適切に管理する必要性があった。今後も校外学習として体験活動を積極的に取り入れていく中で、より教科横断的にカリキュラムを組む必要がある。
- △地域人材や保護者との連携が図れると、体験活動をさらに充実させられると考える。コロナ禍の影響もあるが、ウェブ会議システム等も活用しながら、学校と地域でつくる学びを目指したい。